

# キラキラネームから見た日本人の命名文化の変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朱, 穎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/37415">http://hdl.handle.net/2297/37415</a>

## 研究ノート

### キラキラネームから見た日本人の命名文化の変化

経済学類特別聴講学生 朱 穎<sup>1</sup>

#### ＜概要＞

人間は誰でも名前を持つ。苗字は両親に従うが、名前は様々な方式で名づけられている。日本人はいつも真面目で、伝統を守るというイメージがあり、名前も必ず家族の年長者から一定の伝統風俗で名づけされている。しかし、この数年間、一見しただけでは読めないような「キラキラネーム」が増えてきたように思え、それは特に若い親たちに親しまれているようだ。名付けるという行為には文化特徴があり、また当時の時代の影響も関係している。子供の名前には親の期待や願望が注がれている。日本人の名付け方式は確かに時代によって変遷する。本稿では先行研究と調査した資料やデータに基づいて、「キラキラネーム」が現れた原因とその影響及びその裏の日本人の命名文化観念の変化を探ってみたい。

#### ＜キーワード＞

命名 日本人 「キラキラネーム」 文化特徴 観念変化

---

<sup>1</sup> Email: joyce.zhu.0924@gmail.com

## <目次>

1. はじめに
  2. 先行研究
  3. 「キラキラネーム」現象
    - 3.1. 「キラキラネーム」の定義
    - 3.2. 「キラキラネーム」の調査
      - 3.2.1. 「キラキラネーム」ランキング
      - 3.2.2. 「キラキラネーム」と漢字に関する考察
    - 3.3. 「キラキラネーム」が現れた原因
    - 3.4. 「キラキラネーム」の問題化
  4. 日本人の命名文化
    - 4.1. 名前の構造と機能
    - 4.2. 名付けの変遷
  5. 名付けの現場
    - 5.1. 昔の名付け事情
    - 5.2. 当世の名付け事情
    - 5.3. 名付け行動の規則
  6. まとめ
    - 6.1. 日本人命名視点の変化
    - 6.2. 今後の名付け傾向の推測
  7. おわりに
- 参考文献

## 1. はじめに

人には誰でも名前がある。これは当たり前のことだろう。現代の日本では、従来の日本語にはない発想の名付けが子供の名前に見られるようになったと感じられる。こうした名前を俗に「キラキラネーム」と呼ぶ。また、インターネットでは、「DQN」（「ドキュン」と発音し、一般に、非常識なことを表わす）というネットのスラングを用いて「DQN ネーム」と揶揄されることも多い。「キラキラネーム」が世間の注目を集め、マスコミで取り上げられるようになったのは 2000 年前後である。1999 年 10 月の朝日新聞に、4 回のシリーズで「どうする・あなたなら…命名狂想曲」と題した記事が掲載された（小林 康生, 2009）。

いつの世でも人の名前は読みにくいものである。しかし、近年の読みにくさはどうしたことであろう。名付けには何らかの規則性があり、その規則性は必ず当時の文化や社会の影響を受けている。一体、古来からの名付け方式の変化はどのような影響によるものだろうか。残念ながら、これまでの日本人の名付け事情に関する研究はほとんどが旧来の命名にのみ着目しており、現代の「キラキラネーム」についての研究は少ない。また、現代の研究は旧来の命名との繋がりを調べるのに十分であるとは言いがたい。

そこで、本稿では、以上の問題点に基づき、先行研究および調査した資料やデータを検討した上で、「キラキラネーム」が現れた原因とその影響及びその背後にある日本人の命名文化の変遷を考察したい。

以下では、さまざまな文献や資料に基づいて、まず「キラキラネーム」という現象を分析し、次に、旧来の命名との結びつきを検討する。

## 2. 先行研究

昔の名付け事情については、すでに数多くの先行研究がある。「キラキラネーム」に関する研究も幾つかある。入手した資料の中から、代表的なものとして次の 4 つを紹介しよう。

出口 顕 (1995: p. 66) は名付けという行動について次のように述べている。

どの社会でも、例外なく、人は本名を持つし、他人に名を授ける。ゆえにこれは自然の領域に属する。しかし、どのような名前を持つ

か、改名の有無、名前の数、名付けの時期、命名者は誰かなどは、社会ごとによって異なる。しかしランダムにあるいはでたらめに名付けてよいのではなく、そこには規則がある。(中略) とはいえ、いずれにせよ、社会ごとの特殊な規従っているという点において、名付けるとは、文化の領域に属することでもある。名付けはひとつの規則をなしている。しかしその規則は、同時に普遍性という性質を持っているのである。

紀田 順一郎(2003: p. 15)は昔の日本人の名付け事情について次のような指摘をしている。

日本人の名前は長い間、倫理的な意味や徳目的な概念、あるいは伝統的な美感を親の願いや期待をこめて表現されることが特色だった。そのことは、たとえば戦後間もない一九四八年（昭和二三）の男子名が『博』『進』『清』『修』『正』など、女性名が『和子』『幸子』『節子』『美代子』『恵美子』などが上位にあることからも知られよう。

佐藤 稔（2007: p. 32）は現代の読み難い名前について次のように分析している。

文字の使い方そのものを多様化させることで親が望ましいと考える現代風の名前や、より個性的な名前になる一方で、社会的機能という面では多少不便な名前が出現している。ほんの一年半ほどの期間のわずかなサンプルでこうしたものが目につくということは、どのように理解すべきであろうか。「現代」という時代のしからしむるところなのか、このサンプルを得た地域の性格によるのか、命名者である人間の「教養」の問題なのか。それらが複合したなかなか解きがたい性格を有するものなのか。或は、運勢と漢字の画数を関わらせ無理な表記にしていることがあるかもしれない。

牧野 恭仁雄(2003: p. 23)は難読の名前について次のように指摘している。

そんな状況のまま、「質より量だ」とばかりに、普通の人が知らないような漢字をやみくもに認めれば、名前にふさわしくない漢字が飛躍的に増える。使える漢字がただ大幅に増えれば便利になるわけで

はない。普通の人が知らない漢字は、それだけで名前には向かない。また、字に変な意味はないか、読み方は正しいか、名付けをする親たちの抱えるリスク、自己責任は大きくなり、名付けそのものが格段に難しくなるのである。

以上の先行研究から、次の4点が指摘できる。

- 1) 名付けという行動には社会的な規則がある；
- 2) 昔の名付けには倫理的な意味や徳目、伝統的な美感という特徴がある；
- 3) 現代の名付け行動は社会的な規則を破った、個性を重視するような傾向がある；
- 4) 現代の名前の難読化の1つの原因は、親の無責任である。

しかしながら、昔から今までの名付けの変化の原因と影響は明らかにされていない。

### 3. 「キラキラネーム」現象

『週刊ポスト』(2014年3月7日号)に次のような記事が掲載されている<sup>2</sup>：

嵐のように過ぎ去った五輪のなかで、競技以上に「名前」で鮮烈な印象を残したのが、スキージャンプ男子団体で銅メダルを獲得した清水礼留飛（れるひ、20）だ。テレビの前の視聴者が、彼のジャンプの際、「いったい何て読むんだ」と固唾をのんで見守った。(中略) 今回のソチ五輪では、このように個性的な名前、いわゆるキラキラネームの選手が目立った。スノーボード・ハーフパイプの岡田良菜（らな、23）は、『未来少年コナン』の登場人物「ラナ」が由来で、フィギュア金メダルの羽生結弦（ゆづる、19）だって初見で読める人はなかなかいない（由来は「弓の弦を結ぶように凜とした生き方をしてほしい」と父が命名）。ウィンタースポーツはキラキラネームの宝庫なのだ。(後略)

---

<sup>2</sup> 「なぜソチ五輪代表選手にはキラキラネームが続出しているのか」『週刊ポスト』2014年3月7日号.

育児雑誌『たまごクラブ』、『ひよこクラブ』などで知られるベネッセコーポレーションが、2013年11月29日に2013年に生まれた赤ちゃんの「名前ランキング」を発表した<sup>3</sup>。上位100位なので、オリジナリティが溢れ過ぎの名前はそれほどない。その中で、難読な「キラキラネーム」も目立つ。以下にその一部を引用する。読めるだろうか：

＜女の子＞

1 心春 2 心結 3 心陽 4 和奏  
5 陽愛 6 彩葉

＜男の子＞

1 陽 2 陽大

見慣れていれば意外と読めるのが多いのも事実だ。読み方は以下のようである。

＜女の子は＞

1 こはる 2 みゆ 3 こはる 4 わかな  
5 ひより 6 いろは

＜男の子が＞

1 はる 2 ひなた

これらの名前を見る限り、「キラキラネーム」はすでにそれほど「キラキラ」していないようだ。つまり、ますます「普通」のことになってきているようである。

### 3.1. 「キラキラネーム」の定義

『ニコニコ大百科』によると、「キラキラネーム」という名前の由来は2000年から存在する赤ちゃんの命名支援サイト「キラキラ name」である<sup>4</sup>。そして、「キラキラネーム」はDQN(ドキュン)ネームの別称でもある。DQNネームとは、「DQNの親が子供に付けそうな名前・DQNの親が子供に付けた名前」を指す。「DQN」とは、インターネット用語で「常識を逸脱した人・非常識人」のこと。DQNネームは常識から逸脱した奇抜な名前を揶揄する意味で使われる。なお、DQNネームを付ける親や推進

<sup>3</sup> <http://women.benesse.ne.jp/event/hakase/rank2013/>

<sup>4</sup> <http://dic.nicovideo.jp/a/dqn%E3%83%8D%E3%83%BC%E3%83%A0>

する側（主に報道機関）は、「DQN ネーム」ではなく「キラキラネーム」と称している。これは DQN のという言葉が蔑称として使われているためであろう。そのためテレビのニュース番組などで DQN ネームという言葉が使われることはほぼ無い。

以上の定義から、「キラキラネーム」に対する一般的な印象とその責任者が読み取れる。「常識を逸脱した人・非常識人」から否定的、批判的な印象が、「DQN ネームを付ける親」からすべての責任が親に帰されていることがわかる。

### 3.2. 「キラキラネーム」の調査

なぜ社会は「キラキラネーム」に対して否定的な態度を持つのだろうか？その原因として、以下の 3 点が考えられる。1 つは、昔からの一般的な規則をやぶっている点である。例えば、名前の基本機能は男女の区別を表示することにある。2 つ目は、意味不明な名前は子供の成長にいい期待を与えない点だ。そして、3 つ目は、特に読みにくい名前は子供の今後の生活に支障をきたす可能性が大きい。web サイト「名前由来 net」を利用して、以下に少し例を挙げてみよう<sup>5</sup>。

#### 3.2.1. 「キラキラネーム」ランキング

##### 男女不明：

あくせる、あくび、かれら、キュート、なつく、はいど、ぴか、べすぱ（いずれも男の子の名前）

あづき、いつか、うらん、ちゃら、チロル、キュート、はあと、べび、みに（女の子の名前）

##### 意味不明：

①夜斗、②新智絵、③侑音史、④夢大、⑤雪精、⑥原子、⑦左右

##### 読み方不明：

昊空（そら）、心愛（ここあ）、希空（のあ）、希星（きらら）、

姫奈（ひいな）、七音（どれみ）、夢希（ないき）、愛保（らぶほ）

「キラキラネーム」に対する違和感は社会的な共鳴を引き起こす。従来の日本語にはない、このような発想の名前は音や漢字などの形式だけが「カッコイイ」ように見える。では、その名前の意味は何か。適当な漢字を並べ、当て字にして、それを読んでみると英語名のような感じに

<sup>5</sup> <http://namae-yurai.net/oneYearKirakiraRanking.htm;jsessionid=06B1C0366DB10EBBE2C27D7BCC572900>

なる名前も多い。佐藤 稔（2007: p. 67）は難読なキラキラネームを次のように評価している。

これがハーフの子供とか外国の子供なら読み方だけでいくと素敵だと思うけれども、生粋の日本人の子供の名前として見ると個人的には首をかしげたくなる。

### 3.2.2. 「キラキラネーム」と漢字に関する考察<sup>6</sup>

「キラキラネーム」の漢字表記は特に年配の世代には理解されづらいと言えるだろう。その不自然さをまとめた表を提示する。

表1 <人名における「ぶった切り」の不自然度分類表>

	説明	例
不自然度1	”uu”を”u”、”ou”を”o”とするもの。「ぶった切り」に敏感な限られた一部の人が気に留める程度。	例：「優(ゆう)」→「ゆ」、「央(おう)」→「お」
不自然度2	”ei”を”e”とするもの。多くの人が「ぶった切り」であることに気付くが、不快感はない程度。	例「英(えい)」→「え」、「寧(ねい)」→「ね」
不自然度3	”ai”を”a”とするもの。殆どの人が「ぶった切り」と感じる。不満を感じる人が出る。	例「愛(あい)」→「あ」、「彩(さい)」→「さ」
不自然度4	訓読みの送り仮名を消し去ったもの。殆どの人が違和感をおぼえるが、読めなくもない。	例「舞(ま)う」→「ま」、「咲(さ)く」→「さ」

<sup>6</sup> 本節および次節 3.3. の記述は『ニコニコ大百科』に基づいている：

URL:<http://dic.nicovideo.jp/a/dqn%E3%83%8D%E3%83%BC%E3%83%A0>

不自然度5	その他、音読みの一部を切るもの。殆どの人が違和感をおぼえ、心の安定を図ろうとする。	例：「凜(りん)」→「り」、 「密(みつ)」→「み」
不自然度6	連声(れんじょう)した語を再分解したもの。異常を感じ、たいていの人が思考を中断する。	例：「音」→「觀音(かんのん)」の一部→「のん」
不自然度7	訓読みの一部を切るもの。解読することすら困難になる。	例：「心(こころ)」→「こ」、「叶(かな・う)」→「か」
不自然度8	熟字訓を強引に分解したもの。自力では解読することができない。	例：「雪」→「雪崩(なだれ)」の一部→「な」、「永」→「永久(とわ)」の一部→「と」
不自然度9	西洋語などを更にちょん切ったもの。高出力電波に翻弄され、自由意思で行動できない。	例：「月」→「るな」→「る」、「星」→「すたー」→「す」

### 3.3. 「キラキラネーム」が現れた原因

珍妙な名についての問題は今に始まった事ではなく昔から存在する。ト部兼好(1330年)は「人の名も、目慣れぬ文字を付かんとする、益なき事なり。(人の名前も、見慣れぬ漢字を付けようとするのは、意味のないことだ。)」、「何事も、珍らしき事を求め、異説を好むは、浅才の人の必ずある事なりとぞ。(何事も、珍しい事を求めて、一般的でない事を好むのは、学の浅い人が必ずしそうな事である。) 第百十六段」と述べている。上記のように、古典でも取り上げられている他、安土桃山時代に南蛮(オランダ)との交流を開始した際にも同様の当て字が流行したとされる。近年では、昭和38年に名古屋高裁で出された判決で「親権者がほしいままに個人的な好みを入れて恣意的に命名するのは不当で、子供が成長して誇りに思える名前をつけるべき」との見解が出されており、珍妙な名前を付ける場合は今に始まったことではない。

しかしながら、昨今で子供に珍妙な名を付けるのはごく普通なことになつた。その原因は一体どこにあるのだろう。

#### A. 「親の教養なし」だろうか？

「個性的な名前」を付けるという行為がそのまま「読めない名前」を生み出すかというと、必ずしもそうではないだろう。一定の配慮をすることで、読みにくさはある程度まで回避出来るはずである。我が子に「キラキラネーム」を付ける親たちは教養がないわけではない。その親たちは我が子に「個性」を与えたいたいだけだと思われる。しかし、意図的に難読名を付けるつもりはないが、「個性」という呪縛の上で「キラキラネーム」を付けてしまうのかもしれない。

#### B. 「近年の風潮」だろうか

現在の「キラキラネーム」ブーム、つまり、親たちがこぞって名づけに執心し、「キラキラ」をあれこれ考えるという事態は、一体いつ頃から広がりを見せ始めたのだろうか。紀田 順一郎（2003: p. 20）は次のように述べている。

1990年代の初頭に、「個性」、あるいは「個性的な名前」と深い関わりのある「イメージで選ぶ」などと謳った名づけ本がまとまって出版されていることから、この頃からそうした動向が明確になってきたと思われる。現在起きている「キラキラネーム」ブームが、80年代前後から起きた新しい人気名の流行という一連の流れの中にあることは確かである。

そのブームの中で、当時の新しい名付けの特徴とは自由な発想にあり、名前のバリエーションや数も一気に増えて、かつては考えられないような奇妙な名前が増加しているようである。現代は「PRの時代」と言われ、PRのためには、なるべく強いイメージを持たせるような名前のほうが良いと思われている。

そのPRの中で、名前は第一印象の中で一番記憶に残っているものかもしれない。そうすると、名前は我が子を売り出すための重要な手段となる。

今の親たちは「他の人と同じようでは嫌だ」と考え、「キラキラネーム」を付けているのではないか。しかし、彼らは知らず知らずのうちに他の人と同じように「キラキラ」の風潮に巻き込まれてしまうのを嫌い、

結局「個性」の現れない、逆に「普通」の罠に落ちてしまうことになる。それを避ける「個性の風潮」は「キラキラネーム」が現れた原因の一つとして認められると思われる。

### C. 「漫画やドラマの影響」だろうか

「キラキラネーム」は全部「当て字」ではないが、一部分は「当て字」から連想されるものである。そして、「当て字」という現象の背景には漫画とアニメの「ルビ」があるようだ。

白勢 彩子(2012)は、2011年4月から6月の3ヶ月間に発行された漫画9誌を調査した。いわゆる少年誌2誌(『少年ジャンプ』,『少年マガジン』),青年誌2誌(『ヤングマガジン』,『ビッグコミックオリジナル』),少女誌3誌(『ちゃお』,『りほん』,『花とゆめ』),女性誌2誌(『KISS』,『コーラス』)である。これらの資料から、語とルビとの関係が、本来的な組合せとは異なるものを抽出した。その中の「当て字」の例を挙げる：

- ① 挑戦 チャレンジ(「小日向海流」『ヤングマガジン』, 32巻19号, p.162)
- ② 開始 スタート(「ナゾトキ姫は名探偵」『ちゃお』, 35巻9号, p.358)
- ③ 博士 おっさん(「エア・ギア」『少年マガジン』, 53巻22号, p.156)
- ④ 大財閥 ケタチガイ(「嵐とドクター」『花とゆめ』, 38巻6号, p.411)

福田ますみ(2012: p.123)は「当て字」を使ったキラキラネームの分類をしている。

キャバクラの源氏名風(「姫衣きい」)、アニメのキャラクター(「光宇宙ビカーチュ」)、西洋人名を無理やり漢字に当てはめたもの、漢字の表す意味をそのまま英語に置き換えたもの(「聖母まりあ」)、はたまた、暴走族が愛用する「仏恥義理」のように、漢字一字で一音を表す「暴走万葉仮名」風(「美瑠句みるく」)

まさに多種多様である。今の若い世代の親たちは小さい頃からドラマと漫画の影響を強く受けているため、奇妙な「キラキラネーム」を付けるのに抵抗がないのかもしれない。

特に年配の世代には理解されづらいと言えるだろう。一読して驚くのは、大量の名前のリストがある。その中には確かに、一般の感覚からすると奇抜な名前も含まれている。例えば、「国際性」をイメージする名

前として紹介されているのは、陸王（れお）、来飛（らいと）、騎士（ないと）、愛珠（ありす）などである。それらはすべて、これまで「たまひよ」編集部に寄せられた赤ちゃんの名前約10万件の中からテーマに適合したものを抽出して掲載しているという。これこそが『たまひよ本』の最大の特徴である。小林（2009: p. 66）は次のように指摘している。

こうした大量のデータが長時間にわたって集積されて開示されたことが、現代の名付け状況に与えた影響は極めて大きい。更に重要なのは、それが単純な生データではなく、読者の様々な要求に対応出来るように整理されて提案されたことです。要するに、『たまひよ本』は、データベースと名付けのトレンドを提供したのです。

しかしながら、雑誌は親たちを操ることができるものだろうか、それとも雑誌は親たちに操られているのだろうか。この問題について福田ますみ（2012:p. 127）は次のように述べている。

『たまひよ本』は、トレンドを作ったのはあくまで読者で、この本ではないと否定する。「私たちが読者に対して何かを仕掛けたわけではなく、読者が何を求めているか、そのニーズをあくまで忠実に掬いあげた結果こうなった。常に、読者に背中を押される形で本を作っているのです」（ベネッセコーポレーションたまひよ課・藤森園子さん）。これはまさに、卵が先か、鶏が先か、である。

この回答はまさに適当だと思われる。

「キラキラネーム」が現れた原因は以下のように考えられる。若い世代の親たちは漫画やドラマの影響の上で、「個性」を追求する性格が形成されました。そのため、しだいに「個性」尊重という風潮が引き起こされる。雑誌などのマスコミはその風潮に迎合し、「キラキラネーム」と関連するランキングを掲載する。親たちはそのような雑誌を買い、自分の命名は社会な風潮と一致していると信じる。そして、益々「キラキラネーム」が気になる。その結果、「キラキラネーム」という現象はスパイラルを描くことになり、終わりがなくなるように思われる。

### 3.4. 「キラキラネーム」の問題化<sup>7</sup>

新入学の時期になって教師にとって頭の痛いのは、子供たちの名前を正確に読んで記憶することらしい。最近の学籍簿にある難読名「海」(はるか)、「武央」(たける)など、「親はこういう名前を付けて得意満面なのだろうが、その名前を呼んだり記録したりしなければならない教師のことも、ちらりと考えていただきたい」と教師は考えることになる。「キラキラネーム」のせいで、いじめられた子供もいる。これは学校という世界にとどまらない。

インターネット上で、以下の3つの問題が提出されている。1つ目は、子供の将来の就職活動の際、まさに大問題になることだ。特殊な名前だと大手企業の採用面接に受かりにくい、という事である。実際に2013年行われた企業向けのアンケートの一部にキラキラネームについての項があったが、特に大企業になるほど名前には敏感で、キラキラネームの求職者の採用は避けたい、とする声が多く上がったそうである。

2つ目は、人名を読み間違えたことで訂正・お詫びの放送をするのをよく耳にすることだ。間違った読み方で、個人の同定を誤り、仕事に損害を与えることもないとはいえない。親が特殊な名前を子供につける、イコール、そのような親に育てられた子供も変わっているのではないか、という思いもあるようである。

3つ目は、医療現場からもキラキラネームについて警報が上がっていることだ。読みが難しい名前のせいでカルテの作製に余計な手間を取られることや、救急で運ばれた患者に対して呼びかけが困難となる場合など、具体的に事案を挙げて混乱する医療現場の現状を明らかにされている。名前については基本的に他人が口を出すべきではないことは勿論だが、一分一秒を争う救急現場の医師の苦労もわかってほしいと、スタッフがツイッターなどに投稿している。

このように単純に漢字が読めないことに対する弊害から、名前の印象によるバックボーンの想像など、名前だけで様々な影響があり、それに伴う弊害も当然ながら見過ごせないという事が分かる。

## 4. 日本人の命名文化

### 4.1. 名前の構造と機能

日本の文字は漢字、かな、ローマ字の3種類あり、それらを使いこなしている。人名の場合は、ローマ字は許されていない。漢字も一通りの

<sup>7</sup> 本節の記述は、次のサイトに基づいている：<http://kirakira.ho-zuki.com/>

使いようではない。訓読と音読とがあり、訓読は大きく分けて漢音と呉音に分かれ、まだその他のバリエーションを持ち、訓読も幅広く、さまざまの読みを許容している。まして名となれば、いわゆる珍名に見られるようになんとも形状しがたい困難さをもって、さまざまの読みが成立している。逆に言えば、音で名を聞いて、文字を当てはめるのは実に難しいようである（石井 堅, 1974: p. 12）。

名前が言語的に有する機能の問題も面白い。一般的に言語のもつ機能は次のように考えていい。「指示機能、表情機能、見出し機能、対人関係の調整」。これらは樺島忠夫氏の「表現論」によるものだが、言語としての名の機能もこれに則とる。とりわけ名がもつ機能は初めの3つで、しかも、指示機能と見出し機能において、いかにも名前らしい抜群のものがある。もちろん指示機能は名前が本来よって来たるものであって、指示をするためにこそ名前は付けられる。一人の人間の存在を肯定するべく名前は付けられる。名前の機能の本命はまさしく指示にある（寿岳章子, 1979: p. 33）。

以上の文献から見ると、日本人の命名はそれなりの「構造と機能」を持つ。しかも、面白いことにこの当然の指示機能よりは、はるかに見出し機能のほうが膨らんだ作用をするように思われる。一個の名前が、ある存在を表現するにとどまらず、他にどんなことを自ずと示すのであろうか。それは予想外に幅広い。時代、性別、地域、年齢などのうち何項目かを名前のあり方が表すことが出来る。

#### 4.2. 名付けの変遷

名付けの変遷には2つの大きな方向がある。1つは、アニミズム的名前から人間表示の名前への変遷、他の1つは、「幼名」の出現である。

まず、1つ目から説明する。大宝二年（702）の戸籍に現れる古代地方村落の人名を分析された阿部武彦氏によれば、自然環境物を名前としたものと、「磨」、「足」、「人」、「手」のような人間を表示する接尾語を付した名前に大別でき、前者はさらに三つに分けられるという。第一は天地自然の無生物を名前としたもので、「広国」「国山」「石前」「村嶋」「石村」の類である。国、村、山、石は主として男性表示に、嶋は男女双方に用いられている。第二は動物を名前としたもので、「熊」「犬」「牛」「猪」「馬」「羊」「虎」「竜」「蟲」などである。熊、猪、竜などはもっぱら男性表示に、羊、虎、蟲は主として女性表示に、それぞれ用いられている。動物を人名としているものには、干支の十二支の動物が多いのも特徴である。第三は植物を名前としたもので、「稻」「桑」「栗」「アサ」「林」

などである(阿部 武彦, 1960: p. 84)。

多様な自然環境物を人名としたのは、当時の人々がそれらにも人間と同じく魂があり、人格があり、性がある、と考えていたからだという。アニミズム的信仰に基づく自然観、思想が反映している、とされているわけである(大藤 修, 2012: p. 256)。

ところで、八世紀初頭の戸籍に登場する庶民の名前には、自然環境物にちなむ名に比べれば少ないものの、男性名では人間表示の接尾語を付した名も見られる。阿部(1960)は、これを前者から後者への推移の過渡的状態を示すものとみなし、人間表示名前の出現を、自然環境物と人間とを同一視していた生活の世界から、新しく人間独自の世界を発見したことの反映ではないか、と理解される。

2つ目は、「幼名」の出現である。嵯峨天皇期(809~823年)は、日本の名前史上の転換期であった。嵯峨天皇は唐風文化を摂取する政策をとったが、名前についても唐風化を進めた。すなわち、「童名」(幼名)と「諱=実名」(成人名)を区別し、実名に嘉字(縁起の良い、あるいは良い意味の漢字)を使用し、「系字」を導入したのである。「系字」は、同一世代の男性が実名のうち一字を共有して、父系親族組織=宗族内部における世代序列を表示するもので、輩字とも言う(佐藤 稔, 2007: p. 266)。

## 5. 名付けの現場

### 5.1. 昔の名付け事情<sup>8</sup>

『時代による名前の人気の変遷』にある表を以下に引用する。

表2 大正時代から今までの人気名前

男の名前	
大正時代	「正」の漢字と『清』くんが人気 元号改正の影響で、1912(大正1)年は『正一』くん、1913(大正2)年は『正二』くん、1914(大正3)年は『正三』くんが1位になるなど、「正」の漢字が人気でした。また、『清』くんが大正時代の15年間のうち、1位9回、2位5回と圧倒的な人気でした。『清』くんの人気は昭和に入っても続き、1955(昭和30)年まで常にベスト10にランクインしました。

<sup>8</sup> 本節は以下のサイトに基づいている。

URL:<http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/topics/others1.html>

昭和に元号改正となつた当初	「昭」の漢字が人気 1927(昭和2)年の1位は『昭二』くん、2位は『昭』くん、1928(昭和3)年の1位は『昭三』くんと元号改正が反映されている。1926(昭和1)年は、元号改正が12月25日で7日間しかなかったためか、名前への影響は見られない。
戦時中	『勇』くん・『勝』くんが人気 1937(昭和12)年に日中戦争、1941(昭和16)年に太平洋戦争が勃発、戦中は、『勇』くんと『勝』くんがトップを二分しました。また、この時期『勲』くんや『功』くんもベスト10にランクインしている。
昭和20年代	『博』くん・『茂』くんが人気 1945(昭和20)年に終戦を迎え、『勇』くん・『勝』くんがベスト10から外れ、従来より人気のあった『博』くん・『茂』くんが1位・2位に。『茂』くんは吉田茂首相の影響が大きかったのではないだろうか。
昭和30年代から40年代	『誠』くんが人気 『誠』くんは1952(昭和27)年にベスト3入りしてから、1980(昭和55)年まで常にベスト3にランクイン。28年間で1位の回数は18回と圧倒的な人気。『清』くんから『誠』くんへ世代交代が行なわれたときもある。1974(昭和49)年に映画「愛と誠」が公開された当時も1位でした。 皇室慶事としては、1960(昭和35)年に皇太子さま(徳仁親王、ご称号：浩宮)がご誕生され、同年と翌年1961(昭和36)年には、皇太子さまのご称号浩宮さまの影響を受け、『浩』くんが男の子の名前の1位になっている。
昭和50年代	『大輔』くんブーム 『大輔』くんは1974(昭和49)年にベスト3にランクイン、1986(昭和61)年までベスト3を維持、1979(昭和54)年から1986(昭和61)年まで連続8年間1位でした。1980(昭和55)年の高校野球で荒木大輔選手が甲子園に出場、大輔ブームを支えました。
昭和60年代から平成一桁	『翔太』くん・『達也』くん・『健太』くんが人気 昭和末期からは、『翔太』くん・『達也』くん・『健太』くんが人気となり、1989(平成1)年から1995(平成7)年まで7年連続で、これらの名前がベスト3を占めました。 また、この頃から、「翔」「樹」「海」「翼」など大自然を連想させる名前が目立つようになり、子供の名前は多様化してきました。なお、

	平成への元号改正(1989年)による影響は、大正や昭和のときほど顕著ではありませんでしたが、『翔平』くんがベスト10入りするなど、「平」の漢字を使った名前が多くランクアップしました。
平成10年代 以降	人気は、『大輝』くんから『大翔』くんへ 『大輝』くんは1998(平成10)年に1位となり、2003(平成15)年までの6年間でトップを4回、3位を1回と人気でした。その後、『大翔』くんが2005(平成17)年に1位となり、2009(平成21)年までに4回トップとなっている。 皇室慶事としては、2006(平成18)年に、悠仁さまがご誕生されると『悠斗』くんが6位とベスト10入りし、翌2007(平成19)年には、『悠斗』くんが5位、『悠希』くんが10位とベスト10入りしたほか、男の子の名前で、「悠」を使った名前がベスト100に9個も登場するなど、ご誕生の影響がさらにあらわれました。

女の名前	
大正時代	「千代」の漢字、「文子」ちゃんが人気 大正時代の前半は『千代』ちゃん、『千代子』ちゃんと「千代」の文字を使った名前が人気で、大正の中盤以降は『文子』ちゃんが人気でした。
昭和初期か ら 20年代	『和子』ちゃん・『幸子』ちゃんが人気 『和子』ちゃんは元号改正の影響で1927(昭和2)年から1位となり、以後1952(昭和27)年までの26年間で1位23回、2位3回と、圧倒的な人気でした。『幸子』ちゃんも、1950(昭和25)年まで、1927(昭和2)年を除いて常にベスト3入りするほどの人気でした。なお、1929(昭和4)年から1948(昭和23)年までの20年間のうち、『和子』ちゃん・『幸子』ちゃんのワンツーフィニッシュ(1位・2位)が16年間ありました。
昭和30年代	『恵子』ちゃんと「美」の漢字が人気 昭和30年代は『恵子』ちゃんがベスト3入りを9年間続け、そのうち6年間で1位になるほど人気の名前でした。また、1958(昭和33)年に『久美子』ちゃんが、1960(昭和35)年に『由美子』ちゃんがそれぞれベスト3にランクインし、現在でもよく女の子の名前に使われる「美」の漢字が、徐々に多くなってきました。 皇室慶事としては、1959(昭和34)年に天皇陛下と皇后陛下(美智子さま)がご成婚され、同年、『美智子』ちゃんが4位となりました。

昭和40年代 以降	<p>女の子の名前は多様化、「子」離れが始まる</p> <p>昭和40年代の初めは「美」の漢字が人気で、『由美子』ちゃん、『真由美』ちゃん、『明美』ちゃん、『直美』ちゃんが人気でした。「子」の止め字を使った名前が女の子の名前の大半を占めていましたが、この頃より「子」離れが始まりました。</p>
昭和50年代 後半 から60年代	<p>『愛』ちゃんが人気、「子」離れが完全に定着</p> <p>『愛』ちゃんは、1978(昭和53)年にベスト10入りし、その後1980(昭和55)年に6位、1981(昭和56)年・1982(昭和57)年は2位、1983(昭和58)年から1990(平成2)年まで8年連続で1位をキープ、その後も1995(平成7)年までベスト3にランクインを続けました。また、1986(昭和61)年には、「子」離れは完全に定着、ベスト10から「子」の止め字を使った名前が消えてしまいました。</p>
平成一桁	<p>『美咲』ちゃんが人気</p> <p>『美咲』ちゃんは、1991(平成3)年から1位となり、以後1996(平成8)年まで6年連続トップとなりました。その後もベスト10にランクインし続け、2002(平成14)年と2004(平成16)年には再度1位に返り咲きました。なお、平成への元号改正による影響では、1989(平成1)年に『成美』ちゃんが4位にランクインするなどしました。</p>
平成10年代 以降	<p>人気は、『さくら』ちゃんから『陽菜』ちゃんへ</p> <p>平成10年代前半は、『さくら』ちゃんが人気。『さくら』ちゃんは、2000(平成12)年に1位となり、2004(平成16)年まで5年間で3回トップ(3位が1回)となりました。後半になると『陽菜』ちゃんが人気となりました。『陽菜』ちゃんは、2003(平成15)年に1位となり、2009(平成21)年まで7年間で5回トップとなっています。</p> <p>皇室慶事としては、1990(平成2)年に秋篠宮文仁親王と紀子さまがご成婚され、『紀子』ちゃんが同年73位となり、前年236位から急上升したほか、『早紀』ちゃん(26位)など、紀子さまの「紀」にあやかった名前が、ベスト100に6個も登場しました。また、1993(平成5)年に皇太子さまと雅子さまがご成婚され、同年、『雅子』さまのお名前が162位となり、前年の464位から約300位ランクアップをしました。</p>

このデータをみると、男性は、かつては漢字1字で名付けられる時代が長く続いたが、近年は漢字2字の名前が多い。男性には「～郎」や「～男・～雄・～夫」、女性には「～子」といった文字がみえる。これらは男女それぞれの性別を表す象徴的な下接漢字であったが、近年では、

すっかり姿を消してしまっているようだ。女性では、意味を優先した名前がかつては多かったが、時代が下るにつれて音を優先した当て字の名前が多くなってきてている。またその使用される漢字も草花をイメージさせるものが多い。あるいは、男女とも、戦前戦中においては、戦争の影響を受けた名が多いのも特徴的である。

上記のデータを一瞥しただけでもさまざまな発見があり、たいへん面白い。それぞれの時代の空気を感じることができる。しかし、ここで注目したいのは、時代とともに名前のありようが変化してきた現代において、以前とは明らかに異なる命名のプロセスが存在することである。

## 5.2. 当世の名付け事情

名付けに関する一般的傾向を窺うのに便利な資料として、明治生命保険相互会社が 1982 年以降実施している「生まれ年別の名前調査」がある<sup>9</sup>。それによると、2004 年から 2013 年この 10 年間で生まれの男子の名前ベストテンは以下のようである。

表3 2004～2013 年まで男子の名前ベストテン

1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
平成16年 (2004)	蓮	颯太	翔太 拓海	-	大翔	颯	翔 優斗 陸	-	- 翼
平成17年 (2005) [酉]	翔 大翔	-	拓海	翔太	颯太	翼	海斗 輝	- 太陽 大和	-
平成18年 (2006) [戌]	陸	大翔	大輝 蓮	-	翼	悠斗	翔太	海斗 空 優太 陽斗	-
平成19年 (2007) [亥]	大翔	蓮	大輝	翔太	悠斗 陸	-	優太 優斗	- 大和	健太 悠希 翔
平成20年	大翔	悠斗	陽向	翔太	悠人	-	悠太	- 蓮	駿

<sup>9</sup> [http://www.meijiyasuda.co.jp/profile/news/release/2013/pdf/20131129\\_01.pdf](http://www.meijiyasuda.co.jp/profile/news/release/2013/pdf/20131129_01.pdf)

(2008) [子]										陸
平成21年	大翔	瑛太	楓太	蓮	悠真	陽斗	颯真	颯太	颯真	
(2009) [丑]	翔	大和	-	蓮	颯真	颯空	颯空	颯太	颯太	
平成22年	大翔	悠真	翔	颯太	颯空	颯空	-	-	大雅	
(2010) [寅]	-	-	歩夢	-	颯空	颯空	-	-	颯	
平成23年	大翔	-	颯太	樹	-	-	陸斗	太一	蒼空	
(2011) [卯]	蓮	-	-	大和	-	-	-	-	海翔	翼
平成24年	蓮	颯太	大翔	大和	翔太	湊	-	-	蒼空	
(2012) [辰]	-	-	-	-	悠人	人	-	-	龍生	
平成25年	悠真	陽翔	蓮	大翔	-	大輝	陽向	翔	蒼空	
(2013) [巳]	-	-	-	湊	-	-	-	-	大輝	
										悠人

同様に、女子のベストテンは以下のようである。

表4 2004～2013年まで女子の名前ベストテン

1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
平成16年 (2004) [申]	さくら 美咲	-	凜	陽菜	七海 未来	-	花音	葵	結衣 百花 ひなた
平成17年 (2005) [酉]	陽菜	さくら	美咲	葵 美羽	-	美優	凜	七海 美月 結衣	-
平成18年 (2006) [戌]	陽菜	美羽	美咲	さくら	愛 葵 七海	-	-	真央	優衣 愛美 杏 結菜 優奈

平成19年 (2007) 〔亥〕	葵	さくら 優奈	-	結衣 陽菜	-	七海 美咲	-	美優	ひなた 美羽 優衣	-
平成20年 (2008) 〔子〕	陽菜	結衣	葵	さくら 優奈	優奈	美優	心優	莉子 美桜 結菜	-	-
平成21年 (2009) 〔丑〕	陽菜	美羽 美咲	-	美桜	結愛	さくら 結菜	-	彩乃	七海	ひなた 愛莉 杏奈 優奈
平成22年 (2010) 〔寅〕	さくら 結愛 莉子	陽菜	-	-	美桜	美羽	葵 結衣	-	美咲 結菜	-
平成23年 (2011) 〔卯〕	陽菜 結愛	-	結衣	杏	莉子 美羽 結菜 心愛 愛菜	-	-	-	-	美咲
平成24年 (2012) 〔辰〕	結衣	陽菜	結菜	結愛 ひなた 心春	-	-	心愛	凜	美桜 芽依 優奈 美結 心咲	-
平成25年 (2013) 〔巳〕	結菜	葵	結衣	陽菜	結愛	凜	ひなた 凜	-	愛菜 美結 陽葵	-

整理してみると次のようになる。

### 男子の名前

「大翔」(10回)、「颯太」「蓮」(8回)、「翔(7回)、「翔太」「大和」(6回)、「大輝」「悠斗」「翼」「陸」「蒼空」(4回)、「悠真」「悠人」(3回)、「優太」「優斗」「拓海」「海斗」「陽斗」「颯」「颯真」「陽向」

「湊」「陽翔」(2回)、「陸斗」「歩夢」「瑛太」「輝」「太陽」「空」「健太」「悠希」「悠太」「駿」「瑛太」「大雅」「樹」「太一」「海翔」「龍生」(1回)。

#### 女子の名前

「陽菜」(10回)、「結衣」(8回)、「美咲」「さくら」「葵」「結菜」(7回)、「美羽」(6回)、「七海」「優奈」「ひなた」「結愛」「凜」(5回)、「美桜」(4回)、「美優」「莉子」(3回)、「心愛」「愛菜」「優衣」「美結」(2回)、「陽葵」「真央」「心咲」「芽依」「未来」「心春」「花音」「百花」「愛美」「杏」「美月」「愛」「心優」「彩乃」「愛莉」「杏奈」「杏」(1回)。

1つの表記に複数の読み方がある。以下はその読み方のランキングベストテン(2013年の例)である。まずは男子名である。

表5 男子名の読み方

順位	名前	読み方	人数
第1位	悠真	ユウマ	25人
		ハルマ	13人
		ユウシン	1人
第2位	陽翔	ハルト	31人
		ヒナト	2人
		ヒロト	1人
第3位	蓮	レン	28人
第4位	大翔	ヒロト	12人
		ダイト	5人
		ハルト	4人
		ヤマト	3人
		タイガ	2人
		マサト	1人
第5位	湊	ミナト	27人
第6位	大和	ヤマト	22人
		ダイト	1人
第7位	颯太	ソウタ	22人
第8位	陽向	ヒナタ	20人

第9位	翔	カケル ショウ	10人 10人
第10位	蒼空	ソラ アオイ	18人 1人
	大輝	ダイキ タイキ ハルキ	16人 2人 1人
	悠人	ユウト ハルト	17人 2人

次は女子名である。

表6 女子名の読み方

順位	名前	読み方	人数
第1位	結菜	ユイナ	32人
		ユナ	11人
		ユウナ	3人
第2位	葵	アオイ	40人
第3位	結衣	ユイ	30人
第4位	陽菜	ヒナ	24人
		ハルナ	2人
		ヒナタ	2人
		フナ	1人
第5位	結愛	ユア	12人
		ユナ	7人
		ユウア	5人
		ユイア	2人
		ユメ	2人
第6位	凜	リン	27人
第7位	愛菜	アイナ	12人
		マナ	4人
		アズナ	2人
		メイナ	1人

第 8 位	美結	ミユ ミユウ ミウ ユズキ	15 人 2 人 1 人 1 人
第 9 位	陽葵	ヒマリ ヒナタ ヒヨリ	12 人 5 人 2 人
第 10 位	—	—	—

男女の名前ランキングを見ると、大体は前年の風潮に従っているようである。例えば、2012年男の子の名前のトップ4「蓮、颯太、大翔、大和」はまだ2013年のランキングにある。同様に、2012年女の子の名前のトップ4「結衣、陽菜、結菜、ひなた」もランキングにある。それは、まさに親たちは「個性」を追求するあまり、知らず知らずのうちに「普通」の罠に落ちた証拠になるのではないだろうか。

「拓海、翔太、結衣、愛菜、美咲」などの名前はおそらくアニメとドラマのキャラクターの影響かもしれない。

毎年のランキングの中で、似ている名前の数が多い、毎年全く見えない漢字の組み合わせはあまりない。その理由としては、多分親たちはマスコミの名前ランキングを参考にした可能性がある。

### 5.3. 名付け行動の規則

いずれにしても考え方、名付け方の基準がなければならない。熊崎健翁(1963)によれば、それには10数種類ある。

- 1) 生まれた順からの名づけ方
- 2) 親や、祖父母の名前から
- 3) 実在した、偉い人の名前から
- 4) こうと自分で思う考え方から
- 5) 生まれた季節から
- 6) 健康で長生きするようにとの祈りから
- 7) その時起こった大事変のヒントから
- 8) よい縁起をかついで、その連想から
- 9) 紀元の年号から
- 10) その年の干支から

- 11) 人気歌手とか人気俳優、名司会者、テレビのタレントなどの名前から
- 12) 語音の美しさから
- 13) 自分のその時の心境から

あくまでも、好ましい感じの名、無病息災に関わる名前は名付け時の重要な考え方である。

## 6.まとめ

命名の意味を潘蓄(2013)はつぎのようにまとめている。

人の名前は元々群体の中から個体を識別するために、個体専有の符号として作り出されたものである。しかし、人類の発展に伴って、人名の量・質がともに変化し、次第に識別以上の付加価値が求められるようになった。付加価値の追求は人類の歴史文化の産物であり、この意味では、日本人の名前は日本の歴史文化を映し出す「鏡」ともなっていると言えよう。

### 6.1. 日本人の命名視点の変化

以上の分析から見ると、昔の命名視点と今の命名視点は2つの違いがあると思われる。

1つは「イメージ（意味）」重視から「音（名の響き）」重視へ。表1、表5、表6からみると、今の名付けは名を呼ぶ時の響が非常に重視されていることがわかる。

音の重要さを川岸克己（2013: p. 13）は次のようにまとめている。

最近の名前の付け方は、まず響きの良い音であること、あるいはその名を口にしたときに可愛らしく聞こえることがまず最初の条件で、その心地よい2音から3音の音に、漢字を当てていくという命名のプロセスをとる。すなわち、漢字使用の視点から言うと音仮名的な使用法である。一般的な言い方をすれば「当て字」である。音ひとつひとつに漢字を当てていくことになると、自然使用される漢字はその音を持ってさえいればいいということになる。できれば意味もいい雰囲気のものであればなおよい。これは男性女性いずれでも現象として確認できるが、女性の名前において顕著である。

たとえ音と漢字の関連は不自然でも、いい音なら全部受けいれられる。そういう傾向があるそうである。

2つ目は「古代の名付けの復活」である。上節 4.2. の内容から見ると、古代の名付け規則は「アニミズム」と「幼名化」があると指摘されている。

表 3 と表 4 の結論として、現代の男子の名前のトップ 5 「大翔」(10回)、「颯太」「蓮」(8回)、「翔」(7回)、「翔太」「大和」(6回)と女子の名前のトップ 5 「陽菜」(10回)、「結衣」(8回)、「美咲」「さくら」「葵」「結菜」(7回) は全部「具体的な意味とイメージ」が関係している。特に女の「葵」、「花」、「さくら」は全部植物を関する字であり、それは昔の「アニミズム」と相応しいようである。

男性の名前を特徴づける「太」は、1981 年にトップ 10 にランクインし、その後今日まで現代の男性の名前を代表する漢字となっている。一方の女性の名前を特徴づける「愛」は、1979 年に復活してからずっとトップ 10 にランクインして、こちらもまた現代の女性の名前を代表する漢字となっている。

日本人男性の名として「～太」という名前が 1980 年ころから約 30 年間にわたってトップを維持し続けているということは、単なる一時期の流行ではなく、日本人の名前の大きな潮流といっていいだろう。すなわち、「幼名化」と関連しているようである。

## 6.2. 今後の名付け傾向の推測

「団子」より「花」へは今後の名付け傾向と思われる。「団子」はつまり名前の「イメージ（意味）」、「花」つまり「音（名を呼び時の響）」ということである。各ネットのアンケート調査によると、これからも「キラキラネーム」、名前を呼んだときの響きという点を重視することになる。「古代の名づけの復活」もこれから簡単な字で変わった音で付けられるという傾向かもしれない。

## 7. 終わりに

「キラキラネーム」が現れた原因是簡単にいえば、親たちとマスコミの「追いかけゲーム」と言えるかもしれない。

キラキラネームのメリットとしては、他に見かけない名前のため、覚えやすい、注目してもらえる、等の事項が挙げられる。

子供が生まれた時から国際社会に生きるという事を考慮し、いつか外国人の人たちとも仕事しやすいようにと、外国人によくある名前を当て字に使った名前を付ける場合も多くあるようである。また、将来芸能系の職業を目指したいという事になった場合、少しでも他の人間より目立たなくてはならないため、変わった本名というのはひとつアピール材料として使える。

キラキラネームは他の人と重なることがあまりないため、認識されやすいのだろう。このように、覚えやすい、注目を集めることができる、というのはひとつキラキラネームのメリットである。親が昔憧れていた有名人や好きなアニメのキャラクターと同名を子供につける場合もあり、そういった場合は子供がより思い入れのある存在になった、ということになる。

デメリットとしては、まず単純に読みづらい場合があるということだ。学校や医療機関など、名前を読み上げられる際にスムーズに行かないことが多くなる。その他、名前の印象だけが独り歩きしてしまう場合がある。インパクトのある名前だとそれだけで悪印象を与えたり、人によつては反感を買ってしまう場合もある。

特に年配の世代には理解されづらいと言える。ネット上での評判もあまり良くはなく、最近では就職時の採用試験で悪影響があるという見方も強まってきている。また、幼少の頃に呼ばれる分には可愛らしい名前でも、大人になってしまふと呼ぶ方も呼ばれる方も恥ずかしいということになったり、名前のみで身元が特定されやすいというのは一部の人にとってデメリットとなるだろう。

#### 参考文献：

- 阿部 武彦(1960). 『氏姓』. 至文堂.
- 潘 蕎(2013). 「名前から見る古代貴族の家族観」. 第 8 回国際日本学  
コンソーシアム「食・もてなし・家族 Ⅱ」日本文化部会Ⅱ, お茶の  
水女子大学.
- 福田 ますみ(2012). 「『キラキラネーム』大研究：個性という呪縛」.  
『新潮 45』31(7), pp. 122-130.
- 井川 観象(1968). 『新時代の名前のつけ教室』. 東栄堂.
- 出口 顕(1995). 『名前のアルケオロジー』. 紀伊国屋書店.
- 石井 堅(1974). 「名前をいうことの民俗倫理」. 日本及日本人社, pp.  
76-78.
- 寿岳 章子(1979). 『日本人の名前』. 大修館書店.
- 川岸 克己(2013). 「人名における漢字使用の変化とその誘因」. 『安

- 田女子大学紀要』, 41号, pp. 1-14.
- 紀田 順一郎(2003). 「当世名付け事情」. 『月刊しにか』, 7月号, pp. 15-19.
- 小林 康生(2009). 『名付けの世相史』. 風響社.
- 熊崎 健翁(1963). 『名付けの読本』. 実業之日本社.
- 牧野 恭仁雄(2003). 「人名用漢字・歴史と事件」. 『月刊しにか』, 7月号, pp. 22-27.
- 三浦 展(2005). 『下流社会 新たな階層集団』. 光文社新書.
- 大藤 修(2012). 『日本人の姓・苗字・名前』. 吉川弘文館.
- 佐藤 稔(2007). 『読みにくい名前はなぜ増えたか』. 吉川弘文館.
- 佐藤 若菜(2001). 「日本人の名前--現代にみられる特徴」. 『日本文学ノート』, pp. 74-58.
- 白勢 彩子(2012). 「『当て字』の現代用法について」. 『東京学芸大学紀要 人文社会科学系I』63号, pp. 103-108.
- 田口 二州(1968). 『愛児の名前のつけ方』. 有紀書房.
- 武光 誠(1998). 『名字と日本人』. 文春新書.

#### 参考 URL

『ニコニコ大百科』: DQN ネーム

<http://dic.nicovideo.jp/a/dqn%E3%83%8D%E3%83%BC%E3%83%A0>

『キラキラネームとは』 <http://kirakira.ho-zuki.com/>

『時代による名前の人気の変遷』

<http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/topics/others1.html>